三の峯稲荷大明神の社は大和大路〔伏見街道〕の南にあり。往昔人皇四十三代元明帝の御宇和銅四年二月十一日、午の日此山に出顕し給ふ。本社第一宇賀御魂神、第二素盞嗚尊、第三大市姫（以上）。田中社、四大神、此二神を併せて五座と称す。弘長三年に告あつて文永年中に併奉るなり。〔神祇拾遺〕又田中社の客人神大歳神は鶴と化して稲の実を含んで来現し給ふ、此ゆゑに一切の鳥を献ることを忌といふ。延喜八年故贈太政大臣藤原朝臣時平三箇社を修造す。又永亨十年に社を三の峯より今の地に移すなり。上の社は宇賀御魂伊弉諾伊弉冊尊を崇奉る。二月の初午参りは和銅年中二月初の午の日出現より恒例の祭事となる。倉稲の縁によりて土器黍粟等を土産とするなり。古は神木の杉の枝ををりて帰り家に収しとぞ。

初午をよめる

稲荷山しるしの杉を尋きてあまねく人のかざすけふ哉　　顕仲朝臣

三の峯の御注連張は毎歳正月五日なり。〔古山の半腹に瀧あり、今は水涸て小水流れ麓に至つて祓川といふ〕

捨遺　瀧の水かへりてすまば稲荷山七日のぼれるしるしと思はん　　読人しらず

稲荷行幸の時

夫木　いなり山杉まの紅葉きてみればたゞあを地なる錦なりけり　　周防内侍

例祭は四月上の卯の日なり、神輿五基九条の御旅所より東寺南の大門を掻入て、金堂の前に神輿をすゑ、産子は神供を

頭に戴て運び持て献じ、僧侶はかはるゞ〳〵出て法施し、東寺寺務の僧正をはじめ一山の衆僧は東西に列し、弦召は東のかたに警す、其厳重たる粧ひ他にならぶ事なし、是を東寺の神供といふ。近年安永三甲午年より祭礼の式再興ありて、行列の首には勅裁綸旨、弓、楯の神具かずかず列り、神輿の前後には社司のめん〳〵騎馬にて供奉し、唐鞍の神馬三疋、其外、大幣、榊、翳、菅蓋、錦蓋等雲のごとくつらなり、巍々滔々として壮麗たる祭式なり。